

中学校第1学年美術科学習指導案

1、題材名

Art or Not Art?

2、題材の目標

(1) 美術科としての目標

○提示されたカードの内容について「アート」なのか「アート」でないのかを考え、グループで仕分ける活動を通して、「美術（アート）」についての様々な捉え方や見方を広げる。

(2) 汎用的スキル

○「アートの定義」について話し合いを通して、自分の考えを人に伝えるとともに、他者からの意見も聞きながら、自分の意見を見つめ直し、考えを深めることができる。（批判的思考力）

(3) 態度・価値

○自分の考える「アート観」についての問いを持つとともに、自分と美術とが関わる上で「学び問い続ける力」に働きかける。（好奇心・探究心）

3、生徒の実態

本題材を実施するのは中学校1年生である。個性の伸長も見られ、自分のアイデンティティと社会との間で思い揺らぐ成長過程におかれている生徒たちが多く見受けられる。美術においては、表現においても発想においても生徒の得意や不得意の意識が色濃くなっていく時期でもある。授業の中で様々な経験をしながらも、それぞれに置かれた得意不得意意識に終わらず、一人一人がそれぞれの立場で美術と向き合っていける場を設けていきたい。

4、題材について

①教科から見た特性

「Art or Not Art?」という鑑賞の題材を行う。題材内容としては、提示されたカードを用い、そこに示されたものは「アート」なのか、「アート」でないのかをグループで話し合いながら自分の考えるアートの定義を探る学習活動である。美術の在り様は時代とともに変動的し、「美術」を指し示す「Fine Art」の翻訳において、「Fine=美しい」では収まりきれない表現方法の多様性やその機能、人々にとっての意味に広がりが出てきている。芸術や技芸、技法を意味する「アート」という言葉はこれまでの美術の意味を含みつつも、その定義はあいまいさを持つ。また「アート」自体においても、時代とともにその形態は常に変化を遂げている。生徒たちがもともと持っている既存の「美術」のイメージから一歩離れ、その実態を柔軟に捉えて考えてほしいという意図から「アート」という言葉を主題に用いた。美術の存在が技の巧みとしてだけでなく、変動する社会の中にある人間のありのままの生を受け入れる器として存在し、また、その姿を変えることにその特性があるのであれば、既存の美術について学ぶだけでなく、生徒自身がこれからの美術の可能性について考え、積極的にその定義づけをしていけるような美術（アート）との関わり方に働きかけていきたい。

②汎用的スキルや態度・価値育成の観点からみた特性

自身が漠然と抱いている「美術（アート）」への捉え方、またその価値について立ち止まれる機会を作ってほしい。特に、他者からの発信に頼りすぎてしまう傾向にある生徒にとって、自分の考えを深め、自分の主張を発信できる場を設けてほしいと考えたからである。「自分にとってのアートとは？」という発問は、中学校3年間で生徒自身が美術と関わる上で、抱き続けてほしい発問である。また、それを通して、「学び問い続ける力」となる探究心からの充実と面白さに働きかけるためのきっかけとしていきたい。

5、単元計画と資質・能力を育成する主な手立て（全1時間 本時1/1時間）

	学習活動	関連する主な資質・能力	資質・能力を育成する主な手立て
第1次 (1時間)	・「アート」と呼ばれるものはどのようなものなのかを考える。 ・提示されたカードの内容が「Art」か「Not Art」かをグループごとに話し合いながら仕分ける。 ・カードを仕分ける活動を通して、「アートの定義」について話し合いながら、自分の考えを持つ。	○批判的思考力 ○好奇心・探究心	○多様な視点から考える必要のあるテーマの設定 ○協働が生まれやすい活動・ルールの設定 ○可視化ツールの用意 ○他者との学び合いの設定

6、本時の学習指導

(1) 本時のねらい

提示されたカードの内容について、「アート」なのか「アート」でないのかをグループで仕分ける活動を通して、「アートの定義」について仲間と話し合いながら探る。またその活動を通して、自分の「アート観」についての考えを深めることができる。

(2) 本時の展開

時間	○学習活動 ・ 予想される児童の反応	◇資質・能力を育成する主な手立て ◆評価
導入 7分	○「Q. どれがアート?」「Q. 何がアート?」 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">「Art」 or 「Not Art」 ?</div>	◇何気なく使っている「アート」という言葉に疑問を持つ（多様な視点から考える必要のあるテーマの設定：批判的思考力）
展開 35分	○提示されたカードについて、「Art」か「Not Art」か、グループごとに話し合いながら仕分ける。 <カードの内容> ① 広隆寺 弥勒菩薩半跏思惟像 ② ダ・ヴィンチ/「モナ・リザ」 ③ ピカソ/「泣く女」 ④ デュシャン/「泉」 ⑤ ウォルター・デ・マリア/「The Lighting Field」 ⑥ 須田悦弘/「雑草」 ⑦ 富士山の写真 ⑧ リサイクル場にあるアルミ缶を圧縮した塊の写真 ・自然はアートなのか？ ・写真はアートなのか？ ・既製品はアートなのか？・・・ ○各グループで示されたホワイトボードを全体で共有し、学級全体で話し合い、意見を交換する。	◇アート作品としてつくられたものやそうでないものなど、様々なジャンルのモノをカードとして用意する。（多様な視点から考える必要のあるテーマの設定：批判的思考力） ◇各グループに一枚用意したホワイトボードに、仕分けたカードを貼り仕分ける。また、話し合った空いたスペースに「アートの定義」を書く。 （可視化ツールの用意、協働が生まれやすい活動、他者との学び合いの設定・ルールの設定：批判的思考力）
結末 8分	○カードの内容についての情報プリントの配布 ○「アート」という言葉の捉え方 →美術・芸術の広がりのある意味や可能性を探る機会とし、もともと持っている既存の「美術」のイメージから一歩離れ、その実態を柔軟に捉えて考えてほしいという意図を伝える。 ○活動を通して、自分の「アート観」についてワークシートに考えを記入する。 ○これからの美術授業での活動やそれ以外でのアートとの関りを通して、自分なりの「アート観」を探っていくことを生徒に促す。	◇カード内容についての情報プリントを配布するが、これはカードの「答え」として扱うものではなく、話し合ってきたものが何であったのかを知るための資料である。今現在、アート作品としてしてされているかどうかで終わるのではなく、作品として存在していないものも含め、自分自身がどのように「アート」として価値付けていくのかを強調する。 （批判的思考力） ◆活動を通して、自分の「アート観」について、考えを深めたり広げたりしている。 （ワークシート）